

## ■□ 研究者コメントⅡ 協同組合の展望は、 地域のなかにある

上掛 利博 (京都府立大学公共政策学部教授)



今日は、たいへん興味深い報告を聴かせていただきました。

コープこうべの高田さんから、ヨコ軸とタテ軸というお話がありました。まず、「多様な組合員の参加・広がり」がヨコ軸にあり、それがタテ軸の「安全・安心・信用・信頼」につながるという大きな枠を設定して、組織率77%を超える西宮地域での活動について報告されました。

高田さんは、「西宮の歴史を踏まえて、地域を大切にする」と話されました。私はこの「歴史」ということが非常に大切だと思います。いま日本には、戦争をめぐる危機的な状況や、原発の対応がきちんとされないままという問題があります。さらには「人文社会科学系の学問は日本の大学には要らない」ともいわれています。「歴史を踏まえて地域を大切にする」というお話は、これからの生協の事業のあり方や「地域で安心して暮らす」ことを考えるうえでも必要ではないでしょうか？お話は日本書紀から始まりましたが、それぞれの地域ごとの個性や特色を踏まえることが大事だと認識したところです。

そして、夏祭りや秋祭りなど、祭りの話が出てきたのも、地域特性と切り離せないからではないかと思います。地域で祭りや住民の集まりにも協力していくなかで、生協が地域住民からどのように見られているのかということが課題として出されまし

た。「地域の課題が生協の課題になる」ことについて、どういう仕掛けが必要なのかということで、問題がいろいろ提起されたのではないのでしょうか。

たとえば、西宮市社協、香櫨園分区、コープこうべ、(株)コープフーズの4者で研究会をつくっています。高齢化率がそれほど高くない地域で、配食サービスが月2回しかなかった状況下でどのように対応するか、閉じこもりや身体的事情で参加できないお年寄りがいることから考えた、というお話でした。このように、生協が自らの課題として、地域の課題を受けとめること。そのために、研究会を設置したり、ボランティアを発掘したりという仕掛けがあって初めて、生協の課題として地域住民である組合員の活動を支え、生協がそこに関わっていくことができるということ。それが非常によくわかる報告でした。

コープあいちの向井さんの報告は、まず「谷間にあるニーズ」というお話が非常に興味深く、家族の力が非常に弱まっているなかでコープあいちは最初から「福祉の視点」を掲げて誕生した生協だということでした。そこでの取り組みがいろいろな観点から紹介されました。

特に、いろいろな相談から始まって、困ったときの「なんでも相談」が「出前いっぷく茶屋」まで広がっている。そういうなか

で、パートさんを含む職員のみなさんが、地域の人びとの暮らしをしっかりと見て、そこで気づいた問題をきちんと話し合える雰囲気ができている。それが地域の「見守りそくしん隊」にまで広がっている。非常に興味深いことです。

また、「お互いの顔が見える関係」のなかで、今後は「場づくり・人づくり・情報づくり」がキーワードになるのではないかとということでした。

「地域会議」後のつながりについては、サロン活動がサロンだけで終わるのではなく、移動店舗が移動店舗だけで終わるのではなく、その地域の社協や団地の人たちや行政との関係のなかで「思わざる効果」がいろいろ生まれていることも、興味深く伺いました。「ちょボラ」など、いろいろな言い方が出てきて、地域ごとの方言などに根付いた実践が行われていることがよくわかりました。

生協の持っている専門性、あるいは地域の人たちが持つ生活者としての専門性、そして「組合員を通じて、生活をコーディネートできる組織としての生協」という位置付けがあり、「一人ひとりのために協働できる組織である」というところまで展開されたことが印象的でした。

広島県生協連の高田さんは、「地域から生協を見る」という話をされました。

くらしと協同の研究所では、「生協が地域で」という視点ではなくて、「地域社会が生協という組織や組合員さんを通じて変わることができる」ということを明らかにしてきました。高田さんの報告も、「持続可能性」や「地域コミュニティ」というキーワードをもとに、「地域住民から生協を見た場合にどうなのか」という観点で、生協が地域コミュニティとどう関わるのかを提

起されました。

代理の利かないトップで集まって購買生協と医療生協などが共通の認識を持ち、生協として「安心してらせる地域づくり」に関わっているということでした。

これら3つの事例報告を聴くことで、あらためて浜岡先生の問題提起の意味がわかってきたのではないかと思います。

まず、「標準モデルがない」と話されましたが、人間が相手の福祉の仕事については、マニュアルではない柔軟な対応をすることが大切です。相手によって、歴史も違えば個性も違うなかで抱えている課題に、「マニュアルを超えて」対応するということが、浜岡先生からの問題提起のひとつめだと思います。

2つめは、「くらしの多様性、地域の多様性、生協が多様だ」という話がありました。「普遍的なユニバーサルな福祉」を考える必要性はここにあると思います。多様な一人ひとり、多様な地域、それぞれの歴史、そういうものを踏まえて、生協の違いも踏まえて、なお「普遍的なユニバーサルな福祉」を提起していく。誰もが年老いるなか、みんなが幸せになる方向に向けて、地域社会を変え、人びとの意識を変えていく。そういうアプローチが必要だと考えます。

3つめは、「多様なアクター」という点で、私たちが地域で主人公として関わっていくことの重要性です。「社会活動家(ソーシャル・アクティビスト)」という言い方もされますが、社会に積極的に関わることをしないかぎり「安心してらせる」ことにはつながらないという意味で、生活(くらし)の専門家として私たち生協に関わる人間が提起していく課題は多いのではないかと思います。

4つめは、「生協のすべての事業と活動

を福祉の事例にどうつなげていくか」という問題です。これは、暮らしと経済の安定、生活文化の向上を求める協同組合の役割として、これからの生協の全事業がどう関わるのかという、非常に大きな問題提起だと思えます。なかでも「生活文化」という点では、経験豊かで人生の知恵を蓄えた高齢者の多い「成熟した社会」を、子どもたちを含めた若い人たちに引き継いでいくためにも、学習・教育を含めた「生活文化の向上」をはかる必要があると思えます。

5つめに、「地域包括ケアをカスタマイズ化して、暮らしの身近ななかで」という点です。先ほどの「一人ひとり」とも共通しますが、「地域包括ケアをカスタマイズする」ということを、各地域、各店舗、各生協で考えていく必要があるのではないのでしょうか。

6つめは、「協同組合の地域化」ということです。地域における生活インフラとしての役割を自覚化し、そのことを地域で承認してもらえるような事業や活動を展開していく。それがなければ「誰もが安心してくらするまちづくり」はできません。組合員や地域住民の生活を支え、生活文化を向上させていく協同組合の役割を果たしていくうえで、このことがいよいよ問われているのではないかと思います。

先日大学で、姫路医療生協の「地域包括ケアを考えるシンポジウム」の報告書を3回生の学生に読んでもらって、レポートを書いてもらいました。本日のシンポジウムの焦点とピッタリ重なる内容だと思うので、ご紹介します。

たとえば、「自分たちの願う地域にしていくために、生協を一つの手段としての組織と捉え、自分たちで地域を作っていく、なおかつそれが楽しいと思えることが大切

である。そのためには組合員さんの持っている特技を生かすということが重要なカギになってくる。…自分の得意なことをすることは楽しいし誇らしいことである。加えて、それを人のために生かせるとあれば、自分は楽しいし、人の役に立ち、社会に貢献できる。このように良い関係でケアが回っていけば、どんどん活動も積極的になり、自発的に行われることでケアの対象者も気持ちよくケアを受けられる。…この特技を生かす、社会に貢献するというのはケアされる側にとっても重要なものである。お年寄りもケアをされるだけでなく、人の役に立ちたいのである。人間は誰かに必要とされ、誰かのために生きているという実感がなければ生きる意欲を失ってしまうものである。…その誰かのために何かするきっかけをつくるのが、一番のケアの提供である」と書いています。

地域には、まだまだ元気な高齢者がおられますし、姫路医療生協の調査でも、私たちは高齢者を3つに分けて考えました。つまり、まだまだ元気な60代から75歳ぐらいまでの時期、年ごとに体力が弱まりいろいろな生活ニーズが出てくる80歳以上の時期、その時期に向けて準備をするための75歳～80歳の時期というふうに分けて考えるということが調査のなかで明らかになったわけです。そういう高齢者の人たちの存在を含めて、生活協同組合が地域をどのように捉え、そのなかで生協が役割を果たしていく可能性を考え、すでにそういう実践を「広島県生協連」や「コープあいち」や「コープこうべ」でやられているということ、先ほどのご報告から知ることが出来ました。今後の協同組合の展望は、やはり地域のなかにあるのだと確信することができたということを申し上げて、コメントとさせていただきます。